

関西学院大学 研究成果報告

2021年 3月 5日

関西学院 院長殿

所属：経済学部
職名：教授
氏名：大高 博美

以下のとおり、報告いたします。

研究制度	<input type="checkbox"/> 関西学院留学 長期（滞在国： ） <input checked="" type="checkbox"/> 関西学院留学 短期（滞在国：USA ） <input type="checkbox"/> 宣教師研究期間
研究課題	言語の発話と知覚に関わる音節を音節量の観点から研究する -音節の普遍的構造はどのようになっているか-
研究実施場所	カリフォルニア大学バークレー校言語学科に所属して研究する予定だったが、コロナ禍のため日本を出国できず、終始、国内で研究に従事することになった。ただ、先学期は卒業を控えた院生3名を抱えていたためゼミも実施し、結果、本来あるべき100%自由な研究期間とはならなかった。
研究期間	2020年 8月 17日 ～ 2021年 2月 25日（6ヶ月）

◆ 研究成果概要 （2,500字程度）

上記研究課題に即して実施したことを具体的に記述してください。

当初の研究計画では、主に言語の音節構造（音韻・音声の両サイドから見た本質）について、言語研究の盛んな米国で研究に従事する予定であったが、コロナ禍で出国できず、急遽、国内で実施可能な方言研究も行うことにした。よって、本研究でのテーマは二つあるということである。まず、後者の第二テーマの方言研究について報告し、次に第一テーマの音節研究について途中成果を報告する。

私は以前から地名の難読化プロセスに関心があり、2019年に「地名はなぜ難読化するか？」という論文を発表した（『言語と文化』関西学院大学紀要）。このとき難読地名にはアイヌ語起源のものが多く、北海道を中心に東北地方各地にも点在することを知った。これをきっかけに、今年年末にかけてフィールドワーク（以下FWと表記）を2回実施した。北海道と東北地方の順である。目的は、地名となったアイヌ語は語彙的にどんなもの（川、山、谷、砂地、岩など）が多いか、どの地域に多いか（地域名の何%か）、歴史的にどのような経緯で形成されるに至ったか、アイヌ語の音韻がどのように和語化しているか、などを明らかにすることである。この目的で、各地に点在するアイヌ歴史・民族資料館や図書館を訪ね、言語学的に価値のある（本研究に役立つような）資料（文献）に目を通すとともに重要と思われるものを収集した（許可を得た上での撮影を含む）。当初は現地での方言録音も予定していたが、コロナ禍の下で、安全性の見地から実現しなかった。近いうちに成果をまとめ、論考として発表の予定である。

第3回と第4回のFWは、九州地方の方言研究が目的である。この研究は、琉球方言と九州方言の歴史的・言語学的関連性（主に音声と語彙において）を探るのが目的である。私では、琉球方言は鹿児島藩を通して九州一帯の日本語に大なり小なり影響を与えた可能性がある。琉球（沖縄）は17世紀初頭より鹿児島藩に統治され、互いに通交があったからである。事実、地理的に沖縄に近い奄美大島（そして屋久島、種子島も）は、現在も鹿児島県の一部となっている。よって、琉球語からの影響は鹿児島離島を通じて、九州南部そして北部へと伝播したと推測できる。結果、鹿児島弁は琉球方言からの言語学的影響が最も大きかったはずである。これを実証することが本研究の目的の一つである。第4回目のFWは鹿児島県の種子島と屋久島・奄美大島で実施した。資料収集の方法は、先の北海道・東北でのものと同様である。今後は、少しずつ資料を分析し、結果をまとめ報告したいと考えている。

次に、順序は逆になったが、第一の研究テーマについて、研究の進捗状況を報告する。

音声学や音韻論の研究領域でよく使われる術語（概念）に「音節」がある。しかしこれについては、未だによく分かっていないというのが実情である。ゆえに、音声学者は、例えば英語における二重母音（例：care /eə/）と日本語における母音連鎖（もしくは連母音 例：エア /ea/）の違いをうまく説明できないでいる。多くの研究者が「重母音は全体が1音節で発音されるものであるのに対し、母音連鎖は2音節に跨って発音されるものである」などとして違いを説明するが、実は、この説明は説明になっていない。では「かく言う音節とは何か？」という更なる疑問を読者側に呼び起こさせるだけである。音節の定義を明確にしないままこの術語を使っているからである。

本研究では、音節をリズム単位の機能をもつ音韻として扱う。まずリズムを時間次元上で繰り返される複数音の束（パターン）、もしくはこのパターンが繰り返される現象、と定義したい。ここで時間次元とは、長さの概念を帯びる二次元空間のことである。ユークリッド幾何学的に言えば、点の集合体である。西洋音楽におけるリズムでは、この時間次元上で任意に決められる形（例えば二音から成るパターンでは「長・短」「短・長」など）以外に音の強弱も必須要素として加わるが、明確な拍子性をもたない邦楽（そして日本語も）ではその限りではない。つまり、強さ次元はリズム生成に必須の要素ではなく、リズム構成に必要なものはあくまで長さの概念であることが分かる。だからこそ、我々はまれに音とは関係のない動きにも（例えば視覚的に）リズムが感じられるときがあるのである。

では、我々はどのようにして「線」の長さを測る（認知する）のであろうか。数学では、線分ABが与えられたとき、この線の両端を点A、Bとみなし、その間の距離を測ればよい。原理的には、時間の長さ測定法も同様のはずである。言い方を換えると、生成されたある音声の長さを計るということは、この音声の出だしと最後に二点の存在を認め、その間の距離（時間）を計るということである。リズムの生成・知覚とはまさにこの知的営みのことをいうのである。よって音節とは、発話者側に立てば、一つの線として発した音（群）であり、聴者側に立てば、聞こえ度における変化やリズム単位を手がかりとして一まとまりの線として捉える物理的音（群）のことである。

音節の本質は、時間次元上でリズム単位として機能する点にある。音楽で言えば、主音を中心としてその前後に装飾音を従えることのできるリズム単位がこれに相当する。ただ、音楽の場合は時間次元と高さ次元での空間で規定されるが、言語の音節の場合は時間次元と音色（音素）次元での空間で規定される。言い換えると、繰り返すが、音節とはその出だしと最後尾に音長計測を目的とする「点」が置かれた音もしくは音群のことである。例えば、英語の‘she’や‘strict’のような単音節語を単独で生成する際（もしくは日本語の開音節から成る語を生成するときも）、ここでの音節は長さの計測に起点と着点が使われる。一方、英語の多音節語や日本語の閉音節から成る語を生成する際は、二音節を分ける中点は起点でもあり着点でもある。便宜上、前者のタイプの音節を自立音節と呼び、後者の従属音節と区別することにする。尚、本研究の成果は本学紀要『言語と文化』（2022）に投稿予定である。

報告用紙①

提出期限：研究期間終了後2ヶ月以内

提出先：研究推進社会連携機構（NUC）

※関西学院留学は所属長を経て、宣教師研究期間は大学教員は学部長及び学長を経て院長に、高中部教員は各部長及び高中部長を経て院長に提出してください。

◆研究成果概要は、大学ホームページにて公開します。研究遂行上大学ホームページでの公開に支障がある場合は研究推進社会連携機構までご連絡ください。